

如淨会下の道元禪師

——身心脱落と面授——

佐 藤 秀 孝

道元禪師（一一〇〇—一二五三）（以下、単に道元）の在宋中の動静に関しては、古写本史料の出現などから問題点が複雑となり、多くの研究者が種々に取り上げてはいるが、いまだ決着をみていないのが実情である。本考では天童如淨（一一六二—一二二七）への参考後の動向、とくに身心脱落の時期と面授との関係を中心におなりの解釈と仮説をなしてみたい。

従来、道元が如淨に参じたのは、宝慶元年（一二二五）五月一日の面授時ということで問題はなかつた。それはこれまで如淨の天童山入寺が宝慶元年に入つてからであるという定説が存したからである。しかし、近年、道元に関する古写本史料の発見や鏡島元隆氏の『天童如淨禪師の研究』など如淨に関する研究が進むにつれて、如淨の天童山入寺がその前年である嘉定一七年（一二三四）秋七月か八月の頃であることが確定した。すでに伊藤秀憲氏により、道元が如淨に参じたのもこの時点からであるという新説が出されている。

古写本『建撕記』など古伝は、大慧派の無際了派（一一四

九—一二三四）の示寂で道元が落胆している時に、寧宗の請求により希代不思議にも如淨が天童山に入寺したため、その下で参考するようになったとする。ならば諸山歴遊はそれ以前ということになる。ただ「嗣書」の巻にいう宝慶の頃に天台山や雁蕩山に歴遊したとする記事が問題ではあるが、夏安居の制中を念頭にしても三月末以前には天童山に戻つたはずである。しかるに面授を初相見と解するなら、宝慶元年五月一日まで実に前年の閏八月を含めて一一ヶ月、約一ヶ月の間、道元は如淨に参じなかつたことになつてしまふ。

訂補本『建撕記』はこの間の矛盾を都合のよいよう改変しており、道元の記述とも合致させているが、無際了派や徑山の浙翁如琰（一一五一—一二三五）の示寂の年時がはつきりと確定でき、如淨の入寺も定まつた今日の研究上、古写本の記述はきわめて史実に近いものを含んでいることも明らかになりつつある。私も伊藤氏と同じく嘉定一七年からの参隨説を採りたいが、少なくとも宝慶元年三月末には道元は天童山

の如淨の会下にあつたはずである。『洞谷記』には、「淨老作天童之主」來。未參見、宿疑頓釈」という表現がみられ、入室以前に道元が宿疑を解決していことを伝えている。

宝慶元年夏安居からその直後の道元の行動を挙げてみると、「面授」の卷に五月一日の面授相見がなされ、「仏祖」の卷に夏安居中の仏祖礼拝の行事があり、「明全和尚戒牒奥書」に五月一八日の明全（一一八三一一二二五）の示寂から同二九日の荼毘までの行動があり、「仏性」の卷や『宝慶記』には夏安居中の阿育王山広利禪寺の晦巖大光の下への來訪があり、「宝慶記」に如淨との書簡のやり取りと七月二日からの入室の記事が記され、「日本國十光法師祠堂記」に八月九日の修職郎監臨安府都稅務の虞橿の撰があり、それ以前には明全の記事を収めるべく道元が虞橿に依頼しているはずである。そして『仏祖正伝菩薩戒作法』や「授覺心戒脈」に見る九月一八日の伝戒がなされている。きわめてあわただしい動きの中にありながら、如淨との面授・入室・伝戒が着実になされていることがわかる。この間、必ずしも夏安居中に天童山に留まっていたわけではないのは問題であるが、それはおそらく明全の示寂と関わりあう特別処置であつて、仏舍利信仰の靈場である阿育王山への來訪は異例といつてよく、明全の荼毘後の行動であつたとみられる。

では、五月一日の面授とはいつたといつてよく、明全の

氏は『御遺言記録』（永平室中聞書）などにより、面授における「はじめて」を特別の意味に解している。單なる初相見ではないとするのである。道元は五月一日の面授を在宋中でもつとも印象深い出来事として「面授」の卷に語っている。ならばこの時の面授を詮慧や経豪はどう解しているか。

- ・先師永平寺大和尚、面授の儀を前後にあげらる。これ、はしにはただ面授の次第をつらねられて、奥には悟道の時節をささる歟。所詮、悟道をかかる年紀月日、又これを用ふ。大宋宝慶元年乙酉五月一日。（詮慧「聞書」）
- ・如丈、堂奥を聽許せらるとは、只堂中、若は方丈の内外なむと縦横に出入あらむするにてなし、只不嫌時刻、任心法訪事を、堂奥を聽許するとは云也。身心を脱落するにとは、故方丈、天童に相見悟道の御詞、參禪者身心脱落と云なり。其をいま被書載歟。（経豪「御抄」）

両者とも推測ながら、五日一日の面授相見を悟道の時節と同一時とみているのである。從来はこれを面授の初相見で脱落の境がすでに現成していたとみるのであり、単に初相見の重みを脱落のことばで述べたものとして解されていた。

一般には道元の身心脱落（叱咤時脱落）は、この面授時とは別の時点のことと解されており、面授を強調するあまり、道元には身心脱落の機縁はなかつたとする新説も出されてい

のみで印可することは認めがたい。如淨が日頃から上堂・小参の折はもちろん、僧堂での坐禪時にも拳頭とともに身心脱落の言を語っていたことは、草稿本「大悟」の巻などによつてわかり、道元もはやくから大衆の一人としてこの語を聞いていたはずである。

身心脱落の機縁は、『三大尊行状記』などの伝記史料に載るのみであるが、「面授」の巻の『聞書』や『御抄』の解釈、『永平広録』巻二の『臘八成道会堂上堂』の「一由聞得天童脱落話、而成私道」の言、『御遺言記録』の「先師大悟因縁、依身心脱落話、聊得力」の言などから、道元が如淨の身心脱落の語を聞いて悟道したことはまちがいなかろう。

関わる大事でもあつたわけである。

「面授」の巻を素直に読めば、わずかに身心脱落して、面授を保任できたとするのであり、靈山拈華や嵩山得髓にも比せられる身心脱落が先にあり、面授相見がなされたことにならう。釈迦牟尼仏が摩訶迦葉に面授して「吾有正法眼藏、附彌摩訶迦葉」と語ったのは、初相見の多子塔前ではなく、靈山会上の拈華微笑の際であり、嵩山で菩提達磨が二祖慧可に面授して「汝得吾髓」と示したのも、慧可断臂の初相見ではなく、礼拝得髓した時の印可の言であった。黃梅山で五祖弘忍が六祖慧能に伝衣したのも、嶺南仏性の初相見ではなく、伝法偈を経て後の三更の付法相承のことである。洞山良介における面授が何を意味するかは明確ではない

が、少なくとも先の三例をここに当てはめるとすれば、いまいう面授という表現も単なる初相見を意味することばではないことにならう。得法の事実を背景になされた師と弟子の悟道印可の儀式こそ面授ではなかつたのか。

したがつて、道元は面授した時点で身心脱落したのではなく、身心脱落したからこそ妙高台で如淨との面授がなされたのである。面授を初相見と解したがために、面山瑞方（一六八三一七六九）は古写本『建撕記』を大幅に改訂して訂補本『建撕記』を作らざるを得なかつた。それはまた面山の宗学そのもの、たとえば未悟嗣法の問題など、江戸宗学の根本に

道元は『御遺言記録』において、伝法以後は威儀を具せず

に自由に入室するということを義介（一二一九一一三〇九）に伝えている。当然、如淨と道元の場合も同様であったはずである。ならば、『宝慶記』冒頭の道元の上覆文と如淨の返答文は、単なる參隨を願う書面のやり取りではなく、身心脱落と面授相見を経た後の、入室に関する両者の儀礼上の書簡であつたことにならう。でなければ、道元が自ら「時候に関わらず威儀を具せずに方丈に上つて質問したい」という不遜ともとれる表現はしなかつたはずである。

ただ、問題は『宝慶記』をどう解するかにかかっている。

内容的に一見、初步的ともとれる質問や「身心脱落者、如何」というような質問がみられることから、身心脱落以前の記事であるとする意見が強い。しかし、道元の質問はすでにある程度、如淨の答えを予想してなされている感がある。身心脱落して入室を許された道元が、如淨の中に古仏の風光を垣間見んとした記録こそ、『宝慶記』ではなかつたのか。理としては道元には解決されていても、現実の修行の面でそれをどう実践していくかが問題であったのか。道元は自身の徹底した納得のために、すべてにおいて如淨の点検が欲しかつた。どんな些細な初步的ともみえる問答も、必要なほど周到な貴重な古仏との対話であったのではなかろうか。

広福寺本『仏祖正伝菩薩戒作法』の奥書や泉福寺本「授覺心戒牒」のほか、古写本『建拂記』などによれば、道元は宝

慶元年九月一八日に如淨より伝戒、すなわち中国曹洞宗伝來の「仏祖正伝菩薩大戒」の相承を得ていている。伝戒は伝法を許された人にして、はじめて伝えられるものであり、先の身心脱落や仏祖礼としての面授を前提としてなされた厳肅な儀式である。そんな道元にして、なお宝慶三年（一二二七）夏までの如淨への随侍が必要であった。道元はまさに悟上得悟を実践し、身心脱落後の入室をも重んじた禅者であったわけである。そこに曹洞の縝密な学風をみるとことができよう。

以上、述べた身心脱落と面授に関する見解は、いまだ史料的に乏しく、一つの推測・仮説でしかない。しかし、これは宗学上、きわめて重要な課題でもある。身心脱落をどうとらえるか、仏祖の面授とは何なのか。単なる初相見ではなく、目の当たりに師が法門を授け、弟子が受ける高次の意味ではないのか。もちろん待悟為則を否定しつつ、一回限りの脱落に終わらず、つねに新たに身心脱落し続ける、仏祖向上事の連続としてとらえていく面も道元には存する。ただ、従来いわれている初相見で法門が現成し、それのみですべてが完結としない。道元における面授のもつ意義をいま一度、問い合わせてみたいのが、今回の論考である。

（註略）

△キーワード／如淨と道元・身心脱落・面授

（新潟県少林寺住職）